
病みつき六課

勳b

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

病みつき六課

【Nコード】

N 6 9 1 2 W

【作者名】

勦b

【あらすじ】

病みつきシリーズまさかの連載！！？

これは、彼を巡る物語――

自分の行動を邪魔されて、他人の行動を邪魔する――

これは、そんな物語

ブログな1日（早朝）（前書き）

病みつきシリーズ連載！！

ブログ書き直すかも

ブローグな1日（早朝）

俺の朝は早い

隊長補佐というポジションにいる俺はその名が示す道理隊長の補佐が仕事だ

この場合隊長というのは六課にいる隊長全てだ

——そんな俺の朝は早い

「遅いぞ!!」

まだFWの朝練が始まるより1時間ほど早い

そんな時間に俺は何をやるかと言うと、目の前にいるジャージ姿のシグナムさんと共にランニングだ

「すいません、シグナムさん」

俺はシグナムさんに頭を下げる

「次からは遅れないようにしろ」

「お前が遅れれば、それだけ私とお前が一緒に居る時間が減るの

だからな」

「私はお前と少しでも長く一緒に居たいんだ」

「——誰よりもな」

シグナムさんは虚ろな瞳で俺に言う

「……すみませんでした」

シグナムさんと話していると後ろから声を掛けられる

「隊長補佐、シグナム副隊長おはようございます」

「おはようございます」

ティアナとスバルの2人が俺とシグナムさんに挨拶をする

「おはよう、2人共どうしたの？朝練にはまだ時間があるけど…」

…」

シグナムさんは黙って2人を見ているため、俺が2人に聞く

「隊長補佐が毎朝走ってるって話を聞いたので、私達も着いていこうかなーって思ったんです」

スバルが元気よく応える

2人の服装はジャージなのはそっという意味か……

シグナムさんが2人の前に立つ

「お前達には朝練があるのだからランニングなど止めて、高町との朝練に備えたらどうだ？」

「ランニング後の朝練何て集中して出来ないだろうしな」

「朝練もランニングも両立出来るように頑張りすよ」

「それに、朝練前の軽い運動と思えばこれぐらい大丈夫ですしね」

シグナムさんの忠告をティアナが反論する

「なあ、ティアナ」

俺が呼ぶとティアナが目線を此方に向ける

——ティアナもシグナムさん同様虚ろな瞳で俺を見る

「どうしたんですか、隊長補佐」

「そういえば、隊長補佐は私達のランニングの参加に賛成ですよね」

「隊長補佐が私のことを拒否するなんて——」

「隊長補佐は私と一緒に走ってくださいすよね」

「大丈夫です、スバル程では無いですけど、六課に来てから体力には自信があります」

「隊長補佐の足を引っ張るようなことはしません」

ティアナが黙ると畳み掛けるようにスバルは言う

「そうですよ、隊長補佐」

「いきなり朝練やるよりも、隊長補佐と一緒にランニングしたあ

とのほうが私はいいです」

「隊長補佐は、私を入らないなんて言いませんよね——」
そう言つとスバルも黙つて俺の目を見る

——スバルも虚ろな瞳だ

俺はシグナムさんの方を向く

「とりあえず、今日ぐらい、一緒に走らせても駄目ですか？」

「駄目だ」

シグナムさんは即答する

「さつきも言つたが、私はお前と少しでも長く一緒に居たいんだ」

シグナムさんが理由を聞くとティアナが言つ

「それってただ、自分の立場を利用して隊長補佐を無理矢理自分の傍に居させてるだけじゃないですか」

「隊長補佐がどんなに嫌がつても、立場上隊長補佐はシグナムさんの言つことを聞くしかない」

「どんなに嫌でも、傍に居るしかない」

「それって、隊長補佐が可哀想だと思わないんですか？」

ティアナはシグナムさんを軽く睨みながら言つ

「そんなことあるはずがないだろ」

「こいつは進んで私と毎朝ランニングしているんだからな」

「それに、こいつが私を嫌いなんて——」

シグナムさんもティアナを睨み返す

「今日の昼は、時間が空いてますから、その時間に埋め合わせしますから」

そう言うと、シグナムさんは考える

といつても、直ぐに返事をする

「いいだろう、今日はお前に免じて特別にだ」

「「ありがとうございます」「」

2人は息をそろえて返事をする

「それじゃ、行こっか」

俺はそういつて軽く走りだす

——これが、俺の朝だ

ブログな1日（早朝）（後書き）

こんにちはー戮bでーす

病みつきシリーズ連載！！

というわけで、今回はまだブログその1です

皆さんどうでしたでしょうか

キャラの口調が変だと思った場合、報告してくれたら嬉しいです
！！

PS感想書いてくれたり、お気に入り登録してくれたら嬉しいです
す！！

他の連載、短編の病みつきシリーズもよろしくお願いします！！

プロローグな1日（朝）（前書き）

PV7300

総合評価250

お気に入り登録70

それぞれ達成記念と言う名のプロローグその2です

「があるのに最後に」がないのは仕様です

「が書かれるまでそのキャラのセリフが続くということになります

見にくかったり、前の方が言い方は教えてください

プロローグな1日（朝）

ランニングから帰ってきたあと

俺はシャワーを浴びて、制服に着替えると今日の仕事を確認するため、自室に向かった

俺の部屋の前には彼女——フェイトさんが居た

俺の部屋の前から動かずずっと扉を見ている

俺はフェイトさんに近づき声を掛ける

「何か用ですか？フェイトさん」

フェイトさんは俺に気付くと、近づいてくる

「おはよう、今日はランニングの時間早かったんだね」

「はい、この間から急に早くなって……」

俺が応えるとフェイトさんは悔しそうな表情をする

「そっか……」

「あなたも迷惑だよな」

「朝から無理矢理走らされるなんて」

「いくら隊長格の人はあなたに何でも我が儘言える権利があるって言っても」

「それを朝練前の走りに付き合えなんて――」

フェイトさんは虚ろな瞳で俺の目を見る

――嬉しそうに笑いながら

――俺を見る

「い……いえ、迷惑じゃないですよ

「シグナムさんも普段事務関係の仕事しかない俺を気遣って誘ってくれたんでしょうから」

俺は苦笑いを浮かべながらフェイトさんに言う

「……そっか

「君は優しいし、嫌だなんて我が儘言えないよね」

――でも

と、彼女は続ける

変わらず、俺の目を見ながら

――俺に顔を近付けながら

「私には何を言っても良いんだよ

「あなたの我が儘を何でも聞いてあげる

「だって、私は――」

「2人共何やってるんですか？」

フェイトさんと俺の鼻先が触れ合いそうになるぐらいに近くなつた時

彼女——キャロちゃんに後ろから声を掛けられる

「おはよう、キャロちゃん」

俺は彼女の方を向き、挨拶をする

「おはようございます、お兄ちゃん、フェイトさん」

キャロちゃんが言ったお兄ちゃんとは俺の事だ

……好きに呼んでいいと言ったらこうなった

「……おはよう、キャロ」

フェイトさんは不満そうに彼女に挨拶をする

「フェイトさんはお兄ちゃんに何をしようとしたんですか？」

「お兄ちゃんが嫌がる事したら駄目なんですよ」

「お兄ちゃんは私の——」「私だけの——」

キャロはそう言つと俺の横に立ち、俺の手を取る

——虚ろな瞳で俺を見ながら

——キャロは嬉しそうに笑う

それを見てフェイトさんは軽くキャロを睨む

「別に彼が嫌がる事なんてしてなかったよ」

「彼も私も嫌な事じゃなかったよ

「むしろ、私達の邪魔をしてきたキャラの方が彼は嫌がってるんじゃないかな？」

フェイトさんの言葉を聞くと、キャラちゃんはフェイトさんを睨み返す

「そんなことないですよ

「お兄ちゃんはきつと嫌がってました

「お兄ちゃんは誰にでも優しいから何も言わなかっただけです

「そんなお兄ちゃんに無理矢理キスしようなんて――

「お兄ちゃんが可哀想だと思わないんですか」

キャラちゃんの言葉にフェイトさんは更に強く睨む

「えーと、キャラちゃんは朝練はいいの？そろそろ始まる時間だけど」

俺が2人の間に立ち、キャラちゃんに聞く

「今日のお兄ちゃんの朝はなのはさんと一緒にFWの朝練を見ることに変わったことを伝えに来たんです」

「私もそれを伝えに来たの」

キャラちゃんは俺の質問に応えたとフェイトさんも応える

「わかった、それじゃ行こっか」

俺が言うとキャラちゃんは俺を引っ張るように来た道に戻る

「フェイトさんも、また後で」

俺が後ろを向き、フェイトさんに言う

すると、さっきまでキャラちゃんを睨んでいた表情とは一転して嬉しそうに笑う

「……お兄ちゃん」

キャラちゃんは俺を見る

フェイトさんに向けた表情よりもまだが、俺を睨みながら

「キャラちゃんもありがとう、わざわざ伝えに来てくれて」

俺はキャラちゃんの頭を撫でながら言う

すると、彼女も満足そうな笑みを浮かべ、頬を紅くする

「お兄ちゃんのためなんだから、別にいいよ

「お兄ちゃんが私を誉めてくれるなら——

「お兄ちゃんが私の傍に居てくれるなら——

「お兄ちゃんが喜ぶなら——

「私は、何だってやるよ

「——お兄ちゃん」

キャラちゃんは俺の目を見ながら俺に言う

——変わらない瞳で俺を見ながら

俺の1日は始まったばかりだ

ブログな1日（朝）（後書き）

こんにちはー戮bでーす

病みつき六課は他のよりも書きやすいです

……台詞だけだからかな

ブログその1で既に沢山の方に評価してもらい嬉しいかぎりですー！！

ブログその1を投稿した後に、メッセージで各キャラのヤンデレになった理由を書いて欲しいとあったのでとりあえずブログが終わったら、好評価を記念してヤンデレになった理由を書くかも……

作者の気まぐれで変わりますけどね

書くとしても、書かないとしても、活動報告にてお知らせします
感想くれたら嬉しいですー！！

PS 活動報告にてフェイトの病みつきセイバー（仮）を書きましたので知ってる方は、見てくださると嬉しいですよ

病みつきシリーズのリクエストは何時でもウェルカムです

なのは以外でも知ってれば考えますし、知らなければ、調べた後で考えます

活動報告にてツンデレ+ヤンデレのセリフを書いています……

自信が無いのでコメントくれたら嬉しいです

ブローグな1日(訓練)(前書き)

総合評価400達成!!

お気に入り登録130達成!!

PV19000達成!!

今回も短めです

プロローグな1日（訓練）

キャロに引つ張られるがまま俺が着いたのは六課の訓練場だ

今はFW達の訓練を少し離れた場所でヴィータと見ている

「ヴィータは訓練に参加しないでいいの？」

俺の隣に立っているヴィータに話し掛ける

「まあ、なのは1人で充分だろうしな」

今俺達がやっているのは動きのチェックだ

「それに、お前の隣にいたいしな

「朝会おうとしてもシグナムに邪魔されるし

「昼は隊長格の奴らが

「夜はなのはとフェイトが邪魔するしな

「たく、揃いも揃ってあたしの——」

「ヴィータちゃんの何なのかな？」

ヴィータがいい終わるより先になのはさんが此方に近づきながら
言う

「……FW達の訓練はいいのかよ」

「自主訓練させてるから大丈夫だよ」

軽く睨みながらヴィータが言い、ニコニコとした笑顔でなのはさん
んは応える

「それよりも早く教えてよ

「彼はヴィータちゃんの何なのかな？

「何——なのかな？」

——なのはさん言う　そ——の目は笑ってなく

——静かにヴィータさんを睨みながら

「こいつはあたしの大事な人だ

「——あたしだけの

「——大事な」

ヴィータは俺の手を軽く握りながら言う

「そんなこと言わないでよ　「彼だって困っちゃうよ

「彼は私の大切な人なんだから

「ヴィータちゃんでも彼を困らせるようなことしたら——

「——許さないよ」

なのはさんは俺の手を取りながら言う

「何でこいつがなのはの大切な人になってるんだよ

「我が儘言ってるのは自分だろ

「こいつはなのはのこと嫌いかも知れないんだぞ

「それに——

「こいつが好きなのはあたしだ」

ヴィータは俺の手を握る力を強くし、なのはさんを更に強く睨む

「止めなよ、ヴィータちゃん

「彼が好きなのはヴィータちゃんじゃないよ

「彼は誰に対しても優しいから、ヴィータちゃんは誤解してるだけ
「だって――

「彼が好きなのは――」

なのはさんも負けずと俺の手を強く握り、ヴィータを睨み返す

「勘違いしてるのはなのじゃないのか？

「こいつは優しいから――

「あたし以外の奴に優しくする意味なんか無いのに

「なのはみたいに勘違いする奴が増えるだけだってのに」

「彼が優しくするべきなのは私だよ

「彼は私だけ見てればいい」「彼は私の傍に居るだけでいい

「彼は私のことだけ大切にすればいい

「彼は――

「――私の」

――お互いに口を閉じる

――互いに互いを睨みながら

そんな2人は声を掛けられる

「何やってるんですか？」

声を掛けてきた彼女——ティアナは首を傾げながら言う

「……自主訓練は終わったのかな、ティアナ」

なのはさんはティアナの方を向くと言う

「はい、一通り終わりました」

「それよりもなのはさん、隊長補佐の手を離してくれませんか
隊長補佐に触れていいのは私だけなんですから」

ティアナなのはさんを睨みながら言う

「何でお前だけがこいつに触れていいんだよ」

「こいつはお前達じゃなくて私の——」

「2人共駄目だよ」

「彼は私の大切な人なんだから」

「私だけの——」

「違いますよ」

「隊長補佐は私の傍に居てくれる人です」

「ずっと私だけの——」

なのはさんとヴィータが俺の手を離すと、睨みつける

——自分以外の人を

——虚ろな瞳で

——睨み付ける

「ねえ、2人とも、私とお話しようか」

そう言って歩きだすのはさん

2人はなのはさんの後を追うように歩きだす

そんな3人の背中を見ながら

俺はため息をつく

——今日の朝は、これで終わりだ

ブローグな1日（訓練）（後書き）

こんにちはー 勦bでーす

ヴィータの口調これであつてるかな……

違和感があつたかたは教えてくれたら嬉しいです

さて、前回の後書きに書いたヤンデレになる切っ掛けは

1なのは

2フエイト

3キャラ

4ティアナ

のどれかになります

それぞれのキャラ目線となります

どれが見たいか応えてくれたら嬉しいです!!

P S 病みつき六課は文字数少ないのがデフォになるかも……

ブログな1日(昼)(前書き)

総合評価560

文章、ストーリー評価100

お気に入り登録170

PV33000

ユニーク9000

達成記念!!

ブログその4です

……関西弁難しかった

後書きの方にちょっとした報告がございますので、よかったら見てください

ブローグな1日（昼）

FW達の朝練が終わり、昼飯を食べていると、彼女が俺に話し掛ける

「今日の昼は何か予定ある？」

彼女——はやてさんは俺に聞いてくる

「すいません、今日の昼はちょっと……」

俺が言うと、はやてさんは俺を軽く睨んでくる

「ふーん、私の用事より大事な用事があるんか

「私は君の事が最優先なのに、君は違うんや

「私が君のことを大事にしても、君は私のことを大事にしてくれないんか」

はやてさんは続ける

「悲しいなあ

「君が私を大事にしてくれないなんて

「やっぱり君は——」

「どうかしましたか、我が主」

はやてさんが最後まで言うより先にシグナムさんが話し掛けてくる

「私の彼が我が主に迷惑でもかけましたか？」

「……なあ、シグナム」

はやてさんは目線を俺からシグナムさんに移す

「何時から彼はシグナムのものになったん？」

「彼は何時だって私のものはずやけど」

「そんなことないですよ、我が主」

「彼は何時だって私のものです」

「何時も私のものです」

シグナムさんははやてさんに言う

——互いに変わらない

——虚ろな瞳で

「……なあ、シグナム

「彼は私の事を何時も考えてくれる

「私だけの事を考えていてくれる

「そんな彼がシグナムのものなん？

「どう考えても、私のものと思わん？」

「思いません

「彼が考えてるのは私の事です

「我が主ではなく、私の事を何時も考えてくれる

「彼は私のものですから」

互いにそう言つと、互いに軽く睨み合う

「……まあ、彼を困らせたくないし、今回は大人しく下がることに
しよか」

そう言つと、はやてさんは俺に近づいてくる

「シグナムに迷惑掛けたらあかんよ」

それだけ言っと、はやてさんは来た道に戻る

「それでは、私達も行くでしょう」

俺は立ち上がると彼女に聞く

「昼の仕事は何ですか？」

「私と模擬戦だ」

……え？

「お前と模擬戦をやれる機会は滅多に無いからな

「それに、模擬戦だったら、高町やテストアロッサにも邪魔されないし

「何よりも、お前のことを最も近くで感じることができるしな」

それだけ言っと、彼女は歩きだす

そんな彼女に俺は着いていく

——最悪の昼になりそうだ

そんな予感を胸にしながら

「そんなことがあったの」

目の前の彼女——シャルさんは俺の手当てをしながら言う

「君は戦闘するタイプの人じゃないのに、無茶して戦うから」

……今の俺はボロボロだ

「やっぱり君もお姉さんと一緒に医者をやったほうがよかったんじゃない？」

……よかったかも

「今からでも遅くないよ

「はやてちゃんにお願いして私と2人で六課の医者をやる」

「いや、遠慮します」

俺が断るとシャルマルさんの手が止まる

「なんで断るの？」

「お姉さんと一緒に居ようよ

「私と一緒に居るの嫌？」

「私よりシグナムの方がいいの？」

「愚問だな」

シャルマルさんの問いかけに彼女が応える

「……あら、シグナムお仕事はどうしたの」

「こいつが心配になってな、一区切りついたから様子を見に来たんだ」

それだけ言うと、座っている俺の手を引っ張り無理矢理立たせる

「彼は怪我人なんだからもう少し丁寧に扱ったらどうかしら
「シグナムはそんなに彼のことが嫌いなのか？」

「私がこいつを嫌うはずがないだろ」

シグナムさんは俺の手を引つ張り部屋から出る

「まだまだ仕事は残ってるんだ

「お前は私の傍にいるだけでいい

「仕事が終わるまで私の横にいろ」

俺の目を見ずに要件だけ言うシグナムさん

「——わかりました」

俺はそんな彼女に返事をする

——もうすぐ1日が終わる

プロローグな1日（昼）（後書き）

こんにちはー勦bでーす

プロローグは次回で終わります

プロローグが終わった後の話なんです

……リクエストが欲しいです

言い訳をしたら、私の方もネタはあるのですが、少ない

何よりも少ない

というわけで、リクエストなどくれたら嬉しい

。。。が主人公と。。。をする話

みたいな感じでしたら嬉しい

キャラは4人までにしてくれたらなお嬉しいです

……さつきから嬉しいですばかり言ってる気がする

PSめだかボックス連載予告投稿しました

めだかボックスを知っている方は見てくれたら嬉しいです!!

病みつきシリーズ最新話も投稿しました

ブローグな1日（夜）（前書き）

今回は今までに比べるとヤンデレ要素少なめな気がします

……ヤンデレ要素メインなのに

今回は『！』等を半角から全角にしました

読みにくいと思ったり、このままでいいと思ったりしたらコメント
くれたら嬉しいです！！

プロローグな1日（夜）

仕事が終わったため部屋に帰ろうとした俺に彼女は声を掛ける。

「お仕事お疲れ様」

彼女——高町なのはは笑顔で言う。

「なのはさんもお疲れ様でした」

俺が言うと彼女は嬉しそうな笑みを浮かべる。

「……今日ですか？」

恐る恐る俺が聞くとなのはさんは首を縦に振る

「ほら、早く行こうよ、フェイトちゃんとヴィヴィオが待ってるから」

そう言うとなのはさんは俺の手を取り歩きだす。

……今日も、か

俺はばれないようにため息をつきながらなのはさんに着いていった

「お兄ちゃーん!!」

なのはさんの部屋に入ってすぐにヴィヴィオちゃんが俺に抱きついてくる。

「こんばんは、ヴィヴィオちゃん」

俺の右足に抱きついていて彼女の頭を撫でながら言つと、もう1人の彼女も此方に来る。

「今日も来てくれたんだ」

嬉しそうな笑みを浮かべながら彼女——フェイトさんは言う。

俺は最近なのはさんの部屋に誘われるようになった。

俺としては構わないのだが、女3人に男1人というのは気まずい。

「はい、お邪魔でしたか？」

「全然邪魔なんかじゃないよ」

「むしろ、あなたに会えて私は嬉しいよ」

「ヴィヴィオも!!」

「私も嬉しいよ」

フェイトさんの言葉にヴィヴィオとなのはさんという順で続く。

「紅茶淹れてくるね」

そういつとフェイトさんはキッチンに向かう。

「私達も行こっか」

なのはさんは俺の手を掴んだまま歩きだす。

ヴィヴィオはなのはさんが掴んでない方の手を取る。

……今日はまだまだ疲れそうだ

そんな事を考えながら彼女達に着いていった。

俺は今ソファーに腰掛けている。

右側にはなのはさんが肩と肩が触れ合いそうになるぐらい近くに座っていて、ヴィヴィオは俺の膝の上に座っている。

「ねえ、ヴィヴィオ

「彼の膝の上から退いてあげなよ

「彼だつて迷惑だと思つてるよ」

なのはさんがヴィヴィオに言う。

「そんなことないよ

「お兄ちゃんは私のこと大好きだもん

「だから、お兄ちゃんはヴィヴィオのこと迷惑だなんて思つてない
「私のことだーい好きなお兄ちゃんはそんなこと考えたりしない」

ヴィヴィオは顔を上げ。俺を見ながら言う。

——俺の目を真つ直ぐ見ながら

そんなヴィヴィオなのはさんは言い返す。

「いーいヴィヴィオ

「彼が好きなのは私なんだもん

「彼はヴィヴィオのこと好きなのもしいけどそれは子供としてなんだよ」「だから、我が儘ばかり言つたら駄目だよ」

「何を言つてるかな、なのは」

なのはさんに言い返したのはヴィヴィオちゃんではない。

「何って、彼は私のこと好きって言ってるんだよフェイトちゃん」

俺達の後ろからトレイを持っているフェイトさんが言う。

「彼が好きなのは本当になのはなのかな？」

「私は違うと思うな」

そういつとフェイトさんはテーブルの上にカップを置くと俺の隣に座る。

なのはさんと変わらないくらい近くに座るとなのはさんは言う。

「だったら、フェイトちゃんは彼が一番好きな人は誰かわかるの？」

フェイトさんを軽く睨みながらなのはさんは言う。

「……なのはじゃないよ」

そんななのはさんに睨み返しながらフェイトさんは言う。

「だって彼が好きな人は私だもん

「彼は私のものなんだよ 「だから、私は彼のことは何でもわかるの

「——なのはと違ってね」

「お兄ちゃんが大好きなのはヴィヴィオだよ

「お兄ちゃんは何時もヴィヴィオのこと思ってくれてるもん

「ヴィヴィオもお兄ちゃんのこと何時も思ってるよ 「——大好きなお兄ちゃんのこと」

「彼が好きなのは私だよ 「フェイトちゃんやヴィヴィオじゃない
ない

「彼のことを一番考えてるのも私だし

「彼が何時も考えてるのは私のこと

「だって、私は彼の大切な人たもん

「——誰にも渡さない 「——誰にも渡したくない」

3人がそう言つと、それぞれの相手を睨む。

——光が無い虚ろな瞳で

——はつきりと睨む

俺はそんな気まずい空気の中紅茶を飲む。

——今日ももう終わりか

そんなことを思いながら。

——これが俺の『当たり前の1日』

——彼女達が『病みつき』になった俺の1日

——そんな1日も、これで終わりだ。

プロローグな1日（夜）（後書き）

こんにちはー 勦bでーす

今回は本来ならまだ続く予定でしたがプロローグで書くネタではないと思ったためここまでです

……ヤンデレ要素少ない気がする

さて、前回の後書きにリクエストを書いたのですが、それに応えてくれた方に聞きたいことがあります

そのリクエストを書いて投稿するときに名前を出してよろしいでしょうか？

私が書くまでにコメントをもらえなかった場合はメッセージを送り、それでも無かった場合は名前は出さないようにします

応えてくれたら嬉しいです！！

リクエストの方も募集中ですので、気軽にコメント下さい！！

シチュエーションだけでも有り難いです！！

P S 活動報告にて

『病みつきなのは裏話』（仮）』

『病みつきキャラ（仮）』
を書きました

連載として

『めだかボックス』何でも知ってた少年』

を投稿しました

どれも興味がある方は見てくれたら幸いです！！

病みつきキャラにはちょっとした質問もありますので応えてくれたら嬉しいです！！

私が彼に病みつきになった理由ゝなのは編ゝ（前書き）

プロローグ終わって早々の番外編その1!!

PV70000達成!!

総合評価660達成!!

お気に入り登録200達成記念!!

評価やお気に入り登録してくれた皆様には本当に感謝です!!

私が彼に病みつきのなつた理由なのは編

私の中の彼は特別な存在だ。

誰よりも愛しくて

何よりも大切に

何時までも傍にいたい

そう思うぐらい私は彼が大好きだ。

私が彼のことを好きになつた理由は単純な出来事だつた。

——単純な出来事だ。

機動六課設立前にフェイトちゃんから紹介してもらったのが彼だ。

フェイトちゃんが機動六課に誘つたらしい。

もちろん、この時の私は彼のことを好きになるなんて思つてもいなかった。

彼のポジションは隊長補佐という変わったものだ。

フェイトちゃんとはやてちゃんが考えたと言っていた。

そんな彼の仕事は隊長や副隊長のサポートだ。

もちろん隊長の中には私も入っていて――

「ごめんね、手伝って貰っちゃって」

「別に良いですよ、俺は隊長のサポートが仕事ですから」

彼は笑みを浮かべながら言う。

彼には事務の仕事を手伝ってもらっている。

彼に仕事を手伝ってもらうのはこれが初めてだ。

自分の仕事を彼にやらせているようで余りいい気分じゃないけど……

その時の私は彼とは余り話したことがなかった。

彼はよくフェイトちゃんやはやてちゃんと一緒に居ることが多かったからだ。

お互いに黙って仕事をする。

気まずい空気の中何時間が経つと彼は私に言う。

「後は、俺1人で出来るので高町隊長は休んでください」

私が何か言うよりも先に彼は続ける。

「今日だって朝からFW達の訓練だったんでしょしね、何時も働いている高町隊長にはゆっくり休んで貰いたいですから」

笑みを浮かべながら彼は言つと私を見ずに仕事を続ける。

「でも――」

「俺のことなら大丈夫ですよ、これが俺の仕事ですから」

彼は私に優しく言う。

「じゃあ、君の言うとおり後は任せようかな」

「はい、任せました」

彼の気遣いを無駄にしなくなかったし、その日は疲れてたから私は彼に残りの仕事を任せた。

「それと、私のことはなのはで良いよ」

「わかりましたなのは隊長」

彼は私の顔を一瞬見ると返事をする。

—— 今思えばその時から私は彼が好きだったのかもしれない。

優しい彼のことが好きだったのかもしれない。

少なくともその時の私は彼のことを『優しい人』とは思っていた。

私のことを気遣ってくれた優しい人だと。

そして、この思いに気付いたのはヴィヴィオと出会って数日後だ。

その頃には彼のまわりにはティアナやスバルがいて、たまにキヤロやエリオが居るぐらいだった。

彼はヴィヴィオが六課に馴染むまではとヴィヴィオの傍にいた。

ヴィヴィオが私とフェイトちゃん以外に懐いたのが彼だったからだ。

私がヴィヴィオと遊ぶ時も大抵彼が居た。

優しい笑みを浮かべながら彼はヴィヴィオの傍にいた。

私に向けた優しい笑みを他人に向けていた。

—— 凄く嫌だった。

胸が苦しくなるとかじゃなくて不快感しかなかった。

—— 彼が私以外の人と話すのを見る。

関係ない

—— 彼が私以外の人を見る。

関係ないはずなのに

—— 彼が私以外の人と仲良くしているのを見る。

関係ないなんて嫌だ

私は彼の傍にいたい。

優しい彼の傍にいたい。

優しい彼ならきつと何時でも私を見てくれる。

優しい彼ならきつといい子じゃなくても私を見てくれる。

優しい彼ならきつと——

何時からか私は彼を部屋に誘うようになった。

ルームメートのフェイトちゃんやヴィヴィオも喜んで彼を歓迎し

てくれた。

日に日に彼のことが更に好きになる。

彼の傍にいらなくても彼の事を考えるだけで更に好きになる。

——優しい彼は私以外にも優しい

——嫌だ

——彼に優しくされていいのは私だけ

私だけがいい！！

こんな我が儘も彼なら聞いてくれるはず。

優しい彼なら聞いてくれるはず。

——でも

私は言わない。

彼が困ることはしたくないから。

そう思っても、最近私の恋路を邪魔する人達が多い。

彼は誰にでも優しいからしょうがない。

誰にでも優しい彼

私にも優しい彼

私以外にも優しい彼

好きだよ

——どんな君でも大好きだよ

——どんな君でも愛してるよ

——でも

邪魔な人達はいらない。

私と彼だけ居ればいい。

彼の傍には私しかいない！！

私以外は必要ない！！

——だから

私は今日も彼を誘う。

今はまだ2人つきりにはなれないけど——

——私は彼と部屋へと向かう。

——邪魔な人なんか

——消えればいいのに

私が彼に病みつきになった理由なのは編（後書き）

こんにちはー 勦bでーす

知ってるか？

原作なら皆仲が良いんだぜ。

……どうしてこうなった！？

まあ、今更ですな。

今回もヤンデレかどうかと言われたら微妙な感じですね。

番外編ですし良いよね？

P S 活動報告にて

病みつきマテリアル

病みつきアリサ（仮）

病みつきvividその1

病みつきステラ（仮）（ガンダム）

病みつき真耶（仮）（IS）

病みつきアインハルト（仮）

病みつきセイバー（仮）（FATE）

を

短編にて

ペルソナ3 / もう1人のワイルドタイプ

魔法少女リリカルなのは〜息抜きという名の予告風短編〜

を投稿しました!!

病みつきvividは短編にするか活動報告で書いておわりにするか悩んでいます。

皆さんの意見が聞きたいです!!

どれも感想くれたら嬉しいです!!

病みつき六課も感想&リクエスト募集中!!

次回は早速リクエストを使わせてもらいます!!

お世話をする1日（早朝）（前書き）

PV80000達成しました!!

沢山の方に見てもらえてうれしいです!!

今回の話をリクエストしてくださった『妄想劇場』さんには感謝です!!

お世話をする1日（早朝）

俺のベッドに彼女は横になっている。

ピンク色の子供っぽいぶかぶかなパジャマを着ており、顔を赤くしながら俺を見ている。

俺はそんな彼女のサイズにあうぐらいの大きさになるまでたたんだ濡れたタオルを額に置く。

「気持ち良いです」

彼女——リインフォース？は言う。

俺がリインさんを看病してるのには理由がある。

——理由がある

何時も道理シグナムさんとのランニングのために早く起き、ジャージに着替えて部屋を出ると俺の部屋の前で倒れていたリインさんと目が合った。

……えっ？

俺が驚きの余り声すら出さずにリインさんを見ていると彼女は言

う。

「助けてください」

今にも消えそうなぐらい小さな声を聞くと、とりあえず彼女を抱えて俺の部屋に迎えると、ベッドの上に寝かせた。

それが今日の始まりだ。

（というわけで、今日のランニングには参加できません）

俺が念話でシグナムさんに伝える。

（そんなのシャマルにでも任せればいいだろ

（貴様は私と共に居るべきだ

（それに、何故我が主ではなく貴様の所に出向いたのだ）

シグナムさんは念話越しでもわかるくらい怒っている。

（この埋め合わせは何時かするんで、今日は休みにしてくれませんか？）

シャマルさんに見せるのははじめは考えてたがリインさんは俺に看病してほしいと言ってるため付き合うしかない。

（むう……埋め合わせか）

シグナムさんが少し黙ると直ぐに言う。

（明後日の夜は空けておけ）

それだけ言うとシグナムさんとの念話が切れる。

「どうだったですか？」

リインさんが俺に言う。

「今日は休みにしてもらいました」

「よかったですっ！」

笑顔でリインさんは言う続ける。

「君の今日の仕事は全てキャンセルしてリインの看病をしてください！」

「はやてちゃんには私が言っときますね」

「君は1日中私の傍にいてくださいよ……！」

リインさんに俺は言い返す。

「流石に全部キャンセルは……」

「何ですか？」

リインさんは言う

——俺の目を見ながら
——はつきりと

「リイン以上に大切なことあるんですか？」

「君はリインのことを最優先してくれないんですか？」

「リインは君のことが最優先ですよ」

「はやてちゃんも大事ですけど——」

「それ以上に君が大事です！」

「リインは君のことが好きですから」

「君はリインのこと嫌いなんですが？」

「リインはこんなにも好きなのに——」

「嫌いなんですが？」

リインさんが口を閉じると俺の目をじっと見る。

「えーと、1日中は無理だと思いますけど、昼までなら傍にいます
「それでは駄目でしょうか？」

俺がリインさんに妥協してもらおうよう頼んでみる。

「……………今日1日はここにいてもいいですか？」

リインさんは風邪で赤かった顔を更に赤くしながら言う。

「大丈夫ですよ」

俺が言つとリインさんは笑みを浮かべる。

「えへへ、それならリイン我慢します!」

嬉しそうに笑いながらリインさんは言う。

「早速はやてちゃんに報告しますね!」

……俺も報告しとくか。

俺は彼女に念話を送る。

(少しいいですか? フェイトさん)

俺の今日の朝は彼女——フェイトさんの仕事の手伝いだ。

(どうかした?)

送って直ぐに返事が帰ってくる。

(朝の仕事なんですけど……)

(今日は私の手伝いだよ)

(実は——)

俺はフェイトさんにリインさんのことを伝える。

(———ですので、朝の仕事を休ませて欲しいんですけど……)

（駄目だよ）

短くフェイトさんが返事をする、続ける。

（リインも大事だとは思っよ

（立派な六課の仲間だもん

（でも、何であなたがリインの看病をするの？

（普通はシャルがするんじゃないかな

（あなたはリインをシャルに預けて私の仕事を手伝うべきだよ

（――傍にいて）

フェイトさんからの念話が止まる。

俺の返事待ちなんだろう。

（リインさんは俺に見てもらいたいって言ってますし、病人の我が儘ぐらいは聞いてあげたいじゃないですか）

この場合リインさんを人扱いするかどうかは割合だ。

（――病人の我が儘ぐらい

（そうだよ、あなたが優しいのは今に始まったことじゃないもんね

（そんな優しいあなたが私は好きだよ

（何かあったら連絡してね、あなたの我が儘だったら私は何でも聞くから）

それだけ言われるとフェイトさんとの念話が切れた。

「はやてちゃんも今日はゆっくり休んでいって言ってください
たよ」

「それは良かったですね」

俺が彼女——リインさんを看病する1日が始まった。

お世話をする1日（早朝）（後書き）

こんにちはー勦bでーす

病みつき六課は大体こんなふうに1日の早朝から始まり朝↓昼↓夜と進んでいく形式にしました。

今回はプロローグに出なかったリインフォース？の登場です。

本当はプロローグではやてと共に登場させる予定でしたがキャラの口調がわからなかったため出番カットしました。

そんなリインフォース？の話のリクエストしてくださった『妄想劇場』さんには感謝です！！

とりあえず当分の間はプロローグに出てなかったキャラ（後はギンガさんとナンバーズ位ですが）を出す予定です。

それでは、次回の後書きと会いましょう！！

PS リクエスト募集中です！！

六課では使えないと思ったりしたら短編の方で使わせてもらいます！！

お世話をする1日（朝）（前書き）

後書きにゲスト登場！！

今回から書き方を修正しました

『——』を基本的に地の文では『——』セリフでは『——』と数を偶数に変えました。

お世話をする1日（朝）

リンさんの看病を初めて何時間かたつたところで、俺は今日、何も口にしていないことに気付いた。

「リンさん、朝食は食べましたか？」

「食欲ないですう」

力なく言うリンさん。

「何か食べないと駄目ですよ」

「お粥でも作ってくるんで、待っててくださいね」

そう言っただけは部屋から出て食堂に向かった。

この時間なら食堂には人はいない。

俺はそう思っていたんだが――

そんな俺の予想を覆すように彼女が食堂にいて――

彼女は何かを作っていて――

「おはよう」

彼女——はやてさんは俺の気配に気付いたのか、こちらを向き首を傾げながら言う。

「おはようございます、はやてさん

「朝食を作ってるんですか？」

六課の食堂は時間限定でフリーになっており、今はその時間でもある。

……まあ、利用する人は殆どいないんだけど

「私は食べたんやけど、リインが食べてないかと思ってな

「せっかくだし、お粥でも作るうかと思ったんや

「君はどうしたん？」

はやてさんはリインさんのことを心配してるらしい。

……家族を心配しない人なんかいないか

「俺も同じです

「リインさんの朝食を作るついでに自分の分も作るうかと思ってたぐらいですね」

「だったら、君の分も私が作るうか」

はやてさんが笑みを浮かべながら俺に言う。

「そんな、悪いですよ」

「1人分作るのも2人分作るのも変わらんよ

「それにな、君のために私が作りたいと思ってるんや

「——君のためだけに」

はやてさんが俺を見つめる。

——濁った瞳で

——俺を見据える

……断るわけにもいかないか

「お願いします」

俺が言うとははやてさんは嬉しそうに笑いながら俺の分を追加で作りはじめた。

はやてさんが料理を作り終わり、リインさんの様子を見たいと言ったため一緒に俺の部屋へと向かった。

「ごめんな、リインも私も君に我が儘ばかり言って」

「大丈夫ですよ

「それに、朝の仕事を休ませてほしいって我が儘を聞いてくれた

じゃないですか」

「ふーん、そうなんだ」

俺の言葉に返事をしたのははやてさんではなく――

「あなたが私以外の人に我が儘言うなんて――

「シヨックだなー」

俺が振り返ると、彼女――フェイトさんは言った。

「フェイトちゃん、仕事はどうしたの？」

はやてさんが一歩前に出てフェイトさんに言う。

「少し休憩してるの」

「休憩がてら、彼の様子でも見ようと思ってね

「そしたら、食堂で2人が話してるのを見つけてね、そのまま跡を追ってたの」

フェイトさんがゆっくりと近づいてくる。

「駄目だよ、フェイトちゃん

「そんなストーカーみたいなこと――

「彼だって嫌がるよ」

「彼が嫌がるはずない!!」

フェイトさんは叩きつけるように叫ぶ。

「はやてに彼の何がわかるの!!」

「彼からすれば私と居られる時間を潰されたんだから、そっちのほうで嫌がつてるよ!!」

「フェイトちゃんこそ彼の何を知ってるん？」

「彼は病人のラインの看病をしたいがためにフェイトちゃんとの仕事を休んだんだよ」

「フェイトちゃんよりもラインのことが彼は大事にしてるんだよ」

はやてさんの言葉を聞くと、フェイトさんははやてさんを一瞬睨むと背を向け、そのまま歩きだした。

「ほら、早く行かないとお粥が冷めちゃうし行こ」

はやてさんは何事も無かったかのように俺の部屋に向かって歩きだした。

……フェイトさんには後で何か言っておこう

そんなことを考えながら俺も自分の部屋に向かって歩きだすため後ろを向く。

すると、はやてさんの顔が真前にあった。

驚きの余り何も出来ずに見ていたら、はやてさんが口を開く。

「今、フェイトちゃんのこと考えてたやろ」

「私と2人でのに何で他人のことを考える？」

「私と2人できるときぐらいは私のことだけ考えてよ」

「何時も大目にみてるんだから——」

それだけ言うとはやてさんは背を向け、今度こそ俺の部屋に向かって歩きだした。

俺はそんなはやてさんについていくように歩きだす。

……何で考えてたことわかったんだろ

「美味しかったです」

俺の部屋につきリインさんと共にはやてさんが作ってくれた朝食を食べ終えた。

途中リインさんが『口移ししてくれなきゃ食べません!』等言っていたが、はやてさんが何とかしてくれたためその話は割合しよう。

リインさんはベッドの上で横になっていて、俺とはやてさんはソファーに座っている。

「ごちそうさま、美味しかったです」

「ふふっ、お粗末さま」

はやてさんは嬉しそうに笑いながら俺とリインさんを見る。

「どうかしたんですか、はやてちゃん」
リンさんがはやてさんに言う。

「いやな、こうやってるとまるで家族みたいやなーって思ってたな」

「家族ですか？」

俺が首を傾げながら言う。

「せや、君がお父さんで私がお母さんそしてリンが子供や」

俺が父親……

それも、はやてさんみたいな美人と

「いつそのこと、本当に結婚する？」

はやてさんは楽しそうな笑みを浮かべながら俺に言う。

「そ、そんな！？ 俺みたいな奴がはやてさんみたいな美人の方
と結婚なんて……」

自分でもわかるぐらい顔を赤くしながら言うとはやてさんは立ち
上がる。

「冗談や」

それだけ言うと俺の部屋から出ていく。

扉が閉まる前にはやてさんはこちらを向くと言う。

「私は告白するよりもされたいしな」

それだけ言っていると扉が閉まる。

……え？

「はやてちゃん大胆ですね」

リンさんが黙っていた俺の代わりに言う。

「リンも告白するよりもされたいです」

楽しそうに笑いながらリンさんは言う。

——はやてさんの問題（？）発言を最後に

——俺の朝は終わった

お世話をする1日（朝）（後書き）

こんにちはー勦bでーす

隊長補佐「こんにちは、名前が無くて作者から書きにくいと言われている隊長補佐です」

書きにくいんだよ

隊長補佐「名前を考えればいいだろ」

何時かな

今回はゲストが来てます！！

隊長補佐「元神魔王シリーズを書いている『パワード・マウンテン』さんのオリキャラ、ミヤさんです！！」

ミヤ「こんにちは、ミヤです！！」

隊長補佐「よろしく、ミヤさん」

ミヤ「よろしく！！」

いきなりテンション高いね、何か良いことでもあったのかい？

ミヤ「良いこと？」

隊長補佐「こいつの言ってることは無視していいですよ」

ひどっ!?

ミヤ「良いことっていうか、プレゼントを持ってきたんだ!」

隊長補佐「お、パワードさんから?」

ミヤ「いや、黠bから」

隊長補佐「もしもし、フェイトさん?ゴミを消してほしいんだけど――」

ちょ! おま!!

やりかねないから!!--ここだったらやりかねないから!!--

ミヤ「……俺もこいつのせいで“ヤ”られてるんだよな」

“月刊恋愛の友”に出させていただいたんだよね。

隊長補佐「『リック・ブラッディ』としてだな。こいつの恋愛

小説が世に広まったら……男逃げて!!超逃げて!!!!」

ミヤ「……大変なんだな」

大変ですとも

そろそろプレゼントあげようか。

ミヤ「オッケー」

ガサツ ↑プレゼントをあける音

ドンツ！ ↑中から重いものが落ちる音

サツ ↑隊長補佐が落ちたものを確認する音

ガツ！ ↑逃げようとする隊長補佐をミヤさんが捕まえる音

何で逃げるんだよ。

隊長補佐「それ見たら誰でも逃げるわあああああ！！！！！！」

ミヤ「すごく……大きいです」

おい、止める！！

今回のプレゼント（？）は最近病みつき六課の感想で話題？になっている『五寸釘』です。

隊長補佐「な、何する気だ！！」

さっきお前はフェイトさんと呼んだろ。

隊長補佐「腹いせか！！？」

ミヤ「あ、来たぜ」

隊長補佐「止めてくれ！！お願いだからフェイトさんに渡さないで！！！！」

「プレゼントありがとうなの」

ミヤ「フェイトとは言っていない」

隊長補佐「その人はもつと駄目えええええ！」

それでは、今回はこの辺りで

ミヤさん、最後に一言！！

ミヤ「元神魔王シリーズよろしく!」

隊長補佐「止めて！！襲うなんて馬鹿な考えしないで！！」

病みつきシリーズもよろしく

隊長補佐「いやだ！！オソワレタクナイ！！！」

それでは、ミヤさんは俺と共に『転成者殺し』の後書きに行きま
しょうか。

ミヤ「オツケー」

PS1 え？ 隊長補佐襲われるの？

と思った方は今日明日中に投稿する予定の病みつきティアナ投稿

後に書く活動報告に期待？

P S 2 『この作品のこのキャラを後書きに出させてやってもいいよ』と言ってくださる方大募集！！！！

原作キャラ以外なら大歓迎です！！

それと、プレゼント等くれたら嬉しいです。

後書きに書かせてもらいます。

ミヤ「プレゼントは頼むものじゃないだろ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6912w/>

病みつき六課

2011年10月10日08時50分発行